

歌誌 黄雞「夏号」投稿歌

山形 黒沼 貞志

歌題 アンソロジー 2010～2015 <

語り合う視線の先のさくら花魅入るふたりの夢の隣に

静寂の弓道場に花の舞う一射待つ間にカメラは連射

吾子を抱き城址の桜を背に見やる視線の先の夢に夢見て

境内の春の陽溜まり心地よく時を惜しまず独り身を置く

若葉萌え古刹のもみじいきいきと光蓄え秋に備へん

ジューンベリー白き花々咲き満ちぬ想い浮かびし朝食のジャム

むせ返る若葉の薫る山恋しこころ急かされ暦めぐれり

一筋のヒコーキ雲に誘われ強める歩み目指す頂いただき

秋天の木漏れ日の中歩み行く朽葉積もるる山路やさしき

錦繡が眼下に広がる尾根に立つ忘るる瞬き消ゆる足痛

雪溪の冷気を纏い吹き上ぐる風に癒され山路下れり

冬ざれの連なる朽ち葉に誘われ佇む社に迫る黄昏

フィットネス終えてつかりし温泉の閉じる眼に夕陽煌めく

切り抜いて重ね置きたる新聞は色褪せてなおコラムの出番なし

道半ば甥の客死の報ありぬ心裂かるる妻子の行く末

一首鑑賞

戸の口に足踏みいれれば焼きたての

パンの香りが家中に満つ 浅井真紀子

一首観賞に於ける立ち位置を考えてみた。一つは自身の経験や詠草の視点、もう一つは未経験・未詠草の世界。後者が力量向上には良いとは思いつつ、パン好きの共感力には勝てずつい前者に目が止まる。映像も目に浮かぶよう。詠者の続く一首「庭先に・・・」からご自宅で焼かれていると推察できた。拙類似詠で弊共感の一端を（朝摘みのバジリコの葉を広げ干す狭き厨にアジアの香満つ：やましん歌壇佐藤幹夫先生選）。

黒沼 貞志